

め で る



「春の宿泊研修・沖島（近江八幡市）にて」

2	<p>ごあいさつ 滋賀医療人育成協力機構理事長退任のご挨拶 認定特定非営利活動法人 滋賀医療人育成協力機構 前理事長 吉川 隆一 滋賀医療人育成協力機構理事長就任のご挨拶 滋賀医療人育成協力機構 新理事長/滋賀医科大学副学長 永田 啓</p>	18	<p>調査 滋賀県の医師不足は改善しているのか</p>
4	<p>スポットライト 近江八幡市の在宅医療・介護連携推進事業の現状と課題 近江八幡市長寿福祉課 社会福祉士 山岡 昌代</p>	19	<p>報告 開催報告／総会報告</p>
6	<p>特集 平成29年度 春の宿泊研修 in 近江八幡市・沖島方面</p>	23	<p>ご入会・ご寄附のご案内／ 里親・プチ里親募集／編集後記</p>
15	<p>地域自慢 近江八幡市</p>		
16	<p>紹介 滋賀医科大学男女共同参画推進室／ 滋賀県医師キャリア・サポートセンター</p>		

Contents

「地域医療を支える 人材の育成を期待」



認定特定非営利活動法人 滋賀医療人育成協力機構 前理事長
吉川 隆一

この度、10年近く務めさせていただいた理事長職を辞することになりました。

滋賀医科大学学長在任中に、文科省GPプログラムとして採択された「地域「里親」による医学生支援プログラム」を引き継ぐ形で立ち上げられた本NPO法人の初代理事長に就任しましたのも、何かのご縁かと思っております。

また、滋賀県から「認定特定非営利活動法人」の認可を受け、本法人への寄付が税控除の対象となり、ご寄付頂く方々への負担が軽減されるようになったことも喜ばしい限りです。ただ、ご寄附だけで当法人の事業を支えるまでにはいたっておらず、なお滋賀県からの助成金に依存している状態です。「湖医会」を中心とした滋賀医科大学卒業生の方々には既に「里親」として多大のご協力を頂いておりますが、法人事業の財政的基盤の安定に関しても更なるご協力を頂ければ幸いです。

皆様ご承知の如く、平成16年度に始められた「新臨床研修医制度」により若手医師の偏在化に拍車がかかり、滋賀県内病院に新たに勤務する新卒医師（研修医）数が減り始め、平成18年には68名と激減しました。その後、多方面からのサポートのおかげで平成28、29年には101名と回復してまいりました。こうした回復基調に本法人の活動が多少ならず貢献出来たのではないかと考えております。ただ、より長く県内に定着することが期待される卒後3年目から始まる「後期研修医」の数は未だ回復していないので、より息の長い活動が必要となるのではないかと考えております。

新たに理事長にご就任頂く永田副学長は本法人設立の契機となった文科省GPプログラムの主任研究者であり、また今回滋賀医科大学同窓会「湖医会」の会長にご就任されたと聞いており、まさに適任者を得たのではないかと喜んでおります。

新理事長のもと、本法人の活動が更に発展し、滋賀県の地域医療に貢献して下さるよう祈念致しております。

滋賀医療人育成協力機構 理事長就任のご挨拶



滋賀医療人育成協力機構 新理事長
滋賀医科大学副学長

永田 啓

このたび、吉川先生の後任の理事長を仰せつかりました永田です。滋賀医科大学の第2期卒業生で、卒業後は滋賀県と大学にて眼科医療と医療情報の研究を行ってきました。いたりませんが、みなさま、よろしくお願いたします。

科学技術の発達により、世の中がものすごく便利になり、インターネットの発達やスマートフォンの普及によって情報伝達が驚異的に簡単になっています。一見、コミュニケーションが良くなっているように思えるのですが、実は直接的な人と人のつながりは、だんだんと希薄になっていきます。

どんなに技術が進んでも、医療は直接的な人と人とのつながりが大切であることに変わりはありません。

私達は日々の診療と滋賀での生活の中で、多くの患者さんや家族の方、地域でがんばっておられる方々とたくさんお話をしてきたのですが、その中で「心優しく、ひとりひとりにちゃんと向き合っ、自分たちの地域で末永く医療を行ってくれる医師、寄り添ってくれる看護師がほしい」という思いを多くの方々からいただきました。それと同時に医師や看護師がどのように育ち、日々どのような忙しい生活を送っているのかということが、一般の方々に、ほとんど知られていないことにも気がつきました。一方、大学で医師や看護師になる勉強にがんばる学生達を教える私達が、忙しさの中で、地元滋賀に関して知らないこともたくさんあることに気がつきました。

医師や看護師は最初から医師や看護師なのではなく、勉学や実習を行い、実際に患者さんに接することで、能力を磨き、次第に医師・看護師になって行きます。大学を卒業して、国家試験に合格しても、それはスタートにすぎず、日々の診療・看護の中で多くの経験をし、少しずつ育っていくのです。多くの時間と経験が必要です。

ですから、自分たちがほしいと思う医師・看護師は、地域の皆さんが自分事として私達といっしょに、親身になって時間をかけて育てていきませんか、という提案をいたしました。こうした思いからスタートした活動が、文部科学省GP「地域『里親』による医学生支援プログラム」として採用され、多くの方々にご賛同いただき、さまざまなアイデアが学内外から出て、現在の形になっています。

国からの援助は長くても3年程度ですので、長い時間のかかる取り組みでは、持続的に事業を続けるベースとしてのNPOの立ち上げが必要です。本当に多くの方々のご協力を得て、短い期間で滋賀県から「特定非営利活動法人」の認可をいただき、吉川先生の多大なご尽力により、滋賀医療人育成協力機構が動き出しました。今ではこの地域里親から始まったプロジェクトから素晴らしい人材が育ち、滋賀県での医療・看護活動に積極的に関わっております。

地域医療に貢献する「良き医療人」を育成するためには、これからも行政、医師会、看護協会、薬剤師会、病院、そして地域住民の方々のご支援・ご協力が不可欠です。

ゆっくりと、でも地に足がついた活動を続けてゆけるように、皆様ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

近江八幡市の在宅医療・介護連携推進事業の現状と課題

近江八幡市長寿福祉課 社会福祉士
山岡 昌代

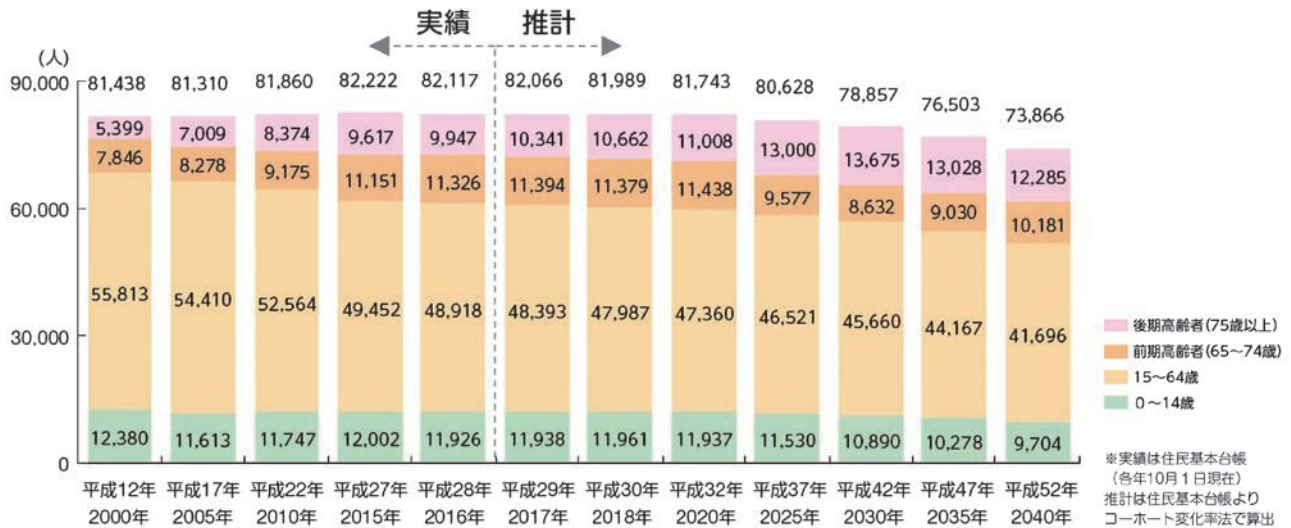


近江八幡市は滋賀県の中央部、琵琶湖東岸に位置し、古くから農業を中心に栄えましたが、中世以降は観音寺城、安土城、八幡山城など多くの城が築かれ、織田信長により開かれた楽市楽座は、近江商人を代表する八幡商人発展の基礎となりました。

現在は、JR近江八幡駅から京都・大阪など主要都市まで1時間程度でアクセス可能と、京阪神のベッドタウン的要素も兼ね備えて発展してきました。一方、東北部には琵琶湖最大の内湖・西の湖を有し、平野部には田園地帯が広がるなど、水と緑の美しい景観に恵まれています。また、平成22年3月に旧近江八幡市と、旧安土町が合併し、現在の近江八幡市となりました。

本市の人口は平成29年以降の推計では減少に転じる見込みですが、後期高齢者人口は平成37年には前期高齢者と逆転し、平成42年にピークに達する見込みです。

近江八幡市の人口推計



第7期近江八幡市総合介護計画概要版より

このような中、近江八幡市内の高齢者へのニーズ調査結果からは、介護や療養が必要となった時にも自宅で過ごしたいとの希望が多いことがわかります。市民が望む介護や医療、さらには多様な看取りの支援を受けられるよう、在宅医療と介護の提供体制の充実が必要になります。

また、国では2025年を目標年度として、高齢者が地域で自立した生活を営めるよう、医療、介護、予防、住まい、

住み慣れた我が家で最期の時間を過ごしたい

- ・ 介護が必要となった時の生活を希望する場所
自宅：53.9%
- ・ 死期が迫っている時の療養生活を希望する場所
自宅：36.3%

(第7期近江八幡市総合介護計画ニーズ調査より)

生活支援サービスが切れ目なく提供される「地域包括ケアシステム」の実現に向けた取り組みを進めることとされています。本市においても、平成30年に策定された第7期近江八幡市総合介護計画（平成30～32年度）やその他上位計画の理念のもと、医療・介護・福祉専門職、地域の人を含め、顔の見える関係づくりを進め、地域のニーズや問題・課題等を把握・解決する仕組みを作り出すために、連携体制の構築が必要です。

第7期近江八幡市総合介護計画

基本理念：

自らが自立意識を持ち共に支え合いながら
住み慣れた地域での生活を継続する

その取り組みのひとつとして、医療連携部会にて市内の医療・介護に関する代表者レベルで在宅医療や介護に関する実態や事業実施内容の共有、課題及び方向性の整理を行っています。また、平成26年度から実施している‘つながりネット’では、顔の見える関係づくりから発展させ、医療と介護の連携強化及び、各専門職種が職能や課題を発信できる場となっており、多職種の理解が進んでいます。

つながりネットの目的

- 高齢者等の市民が、住まいの場を問わず、自宅・施設・医療機関等のどこに居ても自分らしく安心して暮らし続けられるためには、在宅医療・介護の提供体制を充実させるとともに、専門職の連携と地域での支え合いが必要です。
- このしくみづくりを多職種連携の側面から推進することを目的に、医療福祉ネットワーク会議 おうみはちまん（つながりネット）を設置しています。

つながりネットでの話し合い

例：～多職種連携って何……？～

- ・自分たち専門職は、生活のためのツール。利用者や患者の生活を向上させるために、こうやって多職種が意見交換することが支援につながる。
- ・生活者が過ごすための環境を整えるツールが多職種連携だと思う。
- ・‘連携’という言葉だけで終わらず、‘システム’を作ることが多職種連携だと思う。

この他にも、急性期医療から在宅医療・介護までの一連のサービス提供体制を一体的に確保するため入退院時における連携強化や、市民への死生観の醸成を含めた在宅医療・介護に関する正しい知識の普及などに取り組んでいます。

2025年問題や、介護離職、介護職や医療職の慢性的な不足など、高齢者の医療・介護を取り巻く課題は多く、多職種連携だけで解決できるものではありません。今後在宅療養患者が現在の



▲つながりネットの様子
これまでに延べ1000人以上の参加がありました

の1.5倍

になった

ときにも

対応し得るよう、現状の資源・人材の補完や、さらなる多職種連携による支援体制の充実、新たな施策を展開していきます。同時にこれらの在宅生活を支える潜在的な担い手の発掘や育成など、地域でのネットワークの構築・強化に取り組めます。



▲啓発パンフレット▲

平成29年度
春の宿泊研修 in 近江八幡市・
平成30年3月14日(水)～15日(木)

1日目

●沖島のまちなみを見学

現地で活動する看護師さんや住職のお話を聞き、消防艇の見学、島内の散策をしました。また、看護師さんを囲んで昼食をいただき、意見交換を行いました。



救急時には地元の有志の消防団が消防艇で患者さんを最寄りの港まで運ぶ必要があり、特殊な地域事情に対して地域社会全体で柔軟に対応していた事に感嘆した。今後日本において地域医療と地域社会の連携が欠かせない事を感じ、沖島のあり方は一つのモデルとなり得ると感じた。(参加学生感想より)

●交流会



〔第1部〕
講演会・意見交換会等
「在宅医療の現状と課題
～多職種連携の現場から」
近江八幡市長寿福祉課
社会福祉士 山岡 昌代氏

「地域包括ケアと在宅療養支援
病院について」
ヴォーリス記念病院
管理者 三ッ浪 健一先生

第1部での講演会では、在宅医療や地域包括ケア等の取り組みについてお話いただきました。
第2部では、研修先でお世話になった方々や里親、室員の先生方と情報交換を行いました。
第3部 (学生同士の交流会)

●近江八幡市立総合医療センターを訪問

病院の概要について説明を受けた後、院内の各部署を見学させていただき、滋賀医科大学OBの医師から、近江八幡市の魅力や病院の内容等のお話がありました。

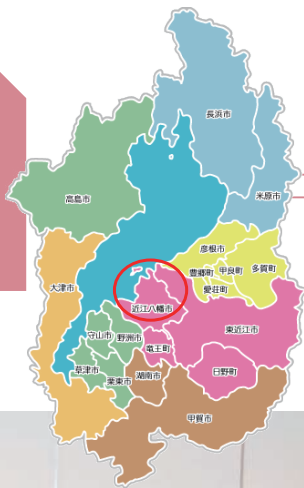


まず驚いたのはその内観の美しさであった。アースカラーを基調とした非常にシックなデザインであり高級ホテルを感じさせる建物であった。病院と聞くとどこか無機質で冷たいイメージを持っていたが、近江八幡市立総合医療センターでは患者さん及びそこで働く医療従事者双方の人間らしさが確保されているように感じた。(参加学生感想より)

今回も、地域の方々をはじめたくさんの医療関係者等の方々にご協力いただき、学びの多い研修となりました。ありがとうございました。



沖島方面



2日目

●ラコリーナ近江八幡、 近江八幡市旧市街地を散策



ボランティアガイドさんの案内で、近江八幡市旧市街地を散策しました。ヴォーリス記念館や旧八幡郵便局など、趣のある建物を訪ねました。



在宅医療の現状について社会福祉士の立場からお話いただきました。



三ツ浪先生が地域医療について楽しそうに熱く語っていた姿、先生と地域医療が輝いて見えてかっこよかったです。(参加学生感想より)



●ヴォーリス記念病院を訪問

事務長から病院の概要について説明を受けた後、ホスピスに勤務しておられる滋賀医科大学OBの医師から、自身の体験を踏まえたお話を聞かせていただきました。その後、礼拝堂やホスピス棟、看護小規模多機能型居宅介護施設・友愛の家などを見学しました。



学科や学年をこえて交流しました。



ホスピス希望館の高橋恵子先生より「人は生きて来た様に死んでいく。だから、今この瞬間を精一杯生きて下さい。」とおっしゃったのが印象的です。(参加学生感想より)

* 学生20名（医学生12名、看護学生8名）が参加しました。



訪問先の皆様からのメッセージ

沖島によろこそ

近江八幡市健康推進課 看護師

中嶋 光代



琵琶湖の中に沖島があります。対岸の近江八幡市から1.5キロ。船で10分、堀切港から沖島港に到着します。沖島の歴史は古く731年、藤原不比等が奥津島神社を設立し、神の島として湖上を行きかう「ふなびと」からの航海の安全を祈願し古くから崇拝されてきました。人が住む島となったのは1156年、平治の乱で沖島に漂着した7名の武士が住み着いたところから始まります。今も7名の苗字が存在し、同じ苗字の方が何名もいるため下の名前と呼ぶのが通例となっています。名前と呼ぶと深いお付き合いをしているわけではないのに親しい間柄になったような錯覚を覚えます。

私は沖島の看護師として働いて3年目を迎えます。島民の方々の健康相談や検診に携わる仕事をしています。平成25年、国の離島振興法により滋賀県離島振興計画が策定されました。「誰もが安心して暮らせる島、いきいきと生活できる沖島」を掲げ、平成28年度から「沖島健康支援事業」がはじまりました。

人口が加速的に減少し1998年には500名あまりでしたが20年後の現在は約250名です。高齢化率55.8%で近江八幡市のなかでも極めて高く高齢化が進んでいる地域です。

古くて懐かしいまちなみ。車が走っていないので澄み切った自然と静かな時間に満たされます。沖島の人の温かさにも触れて……ぜひ足をお運びいただきたいと思います。



▲老人会体操



▲沖島港

■ 宿泊研修を受け入れて

近江八幡市立総合医療センター 副院長・
小児科主任部長・情報管理課課長・
臨床治験センター長

西澤 嘉四郎



湖上で唯一の離島である沖島見学の後、宮下浩明院長より当院の概要説明を行いました。救命センターとして救急隊からの依頼を断らない医療の実践を行い救急車の応需率ほぼ100%を達成しています。また回復リハビリ病棟を地域包括ケア病棟へ変更し、さらに入退院支援センター（患者総合支援課）を昨年度より新設しPFM（Patient Flow Management）すなわち予定入院患者の生活情報・介護状況などの問題を入院前から把握し退院後の生活支援に向け入院後早期より医療・介護・福祉と連携して退院後に入院前に近い状態で生活が送れるように支援を開始しています。病院概要説明後、医学生、看護学生ごとに施設内見学を行った後、講演会と懇親会へ参加しました。

今回の講演会では、三ツ浪健一先生の在宅診療にける熱い情熱がほとばしる素晴らしい講演でした。また長寿福祉課の山岡昌代さんにより医療福祉介護の多職種連携の取り組みの講演を伺いました。この一連の研修に参加して近江八幡市で実践している地域包括ケアシステムの一端を学生さんが肌で感じていただけたと思います。

最後に、今回の懇親会で印象的でしたのは、滋賀医科大学以外の学生さんや滋賀県内出身の学生さんも多く参加され宿泊研修を通じて、滋賀大好き人間が増え、滋賀県の医療・介護・福祉事業と連携がますます発展していくことを期待しています。

近江八幡市立総合医療センター
看護部 看護副部長

大林 ひとみ



今回、NPO法人滋賀医療人育成協力機構様の事業の一環として近江八幡市での宿泊研修が行われ、当院へも医学生・看護学生さん方にお越しいただきました。

当院は「多くの人々との出会いを通じて新しい医療環境の創造に努めます」の病院理念のもとに災害拠点病院、救命救急センターなどの特徴を持った急性期病院として機能しています。また、公立病院の役割としても、住み慣れた地域でその人らしく、安心した医療が受けられる病院、地域住民に選ばれる病院づくりに貢献しています。

当日は災害時に備えた病院構造を含め、様々な機能を果たすための設備や“水・緑・光が薫るガーデンホスピタル”を謳う当院の癒しを感じられる環境などを見学していただき、多くの関心をもっていただけたのではないかと思います。

また座談会では、看護師からチーム医療の現状や看護の専門性など、現場サイドからの話を聞いていただき活発な意見交換もできました。学生の皆さんは看護の魅力を再発見できたのではないのでしょうか。今後も皆様が多くの人との出会いや経験を通じて、みずみずしい感性を磨いていかれること、益々活躍されることを祈念いたします。

■ 訪問先の皆様からのメッセージ

■ 宿泊研修を受け入れて

公益財団法人近江兄弟社ヴォーリス記念病院
理事長・管理者

三ッ浪 健一



2018年3月14～15日には、医学科12名、看護学科8名の学生諸君に来幡いただきました。3月14日には私が「地域包括ケアと在宅療養支援病院」についてお話しし、3月15日には当院ホスピス医の高橋恵子医師が「学生の皆さんに心に留めておいてほしいこと」をお話ししました。

地域包括ケアは人生最期の時まで自分らしく生きたいと望む人に寄り添う活動であり、ホスピスケアは生命を脅かす疾患に伴う問題に直面する患者や家族にできる限り寄り添おうとする活動です。これらはいずれも、高橋医師が言うように、治すことだけではなく、その先にある「死」を見つめられる医療者でなければ十分に行えない活動です。「人は必ず死ぬ」、「人は生きて来た様にしか死んでいけない」、「人は死ぬ時皆さみしさを抱えながら死んでいく」（いずれも高橋医師のスライドより引用）ことを理解し、人生最期の時に寄り添うためには「傾聴する力」と「共感する力」が最も重要であることに気付いていただけたなら、宿泊研修を受け入れた者として、この上ない喜びです。

是非またおいでください。

■ 宿泊研修に参加して(学生の声)

注) 学年は H30.3 時点のものです。



▲沖島にて

滋賀医科大学 医学科第1学年 福村 真優

前回の夏の宿泊研修に続いて、2回目の研修に参加させていただきました。

特に沖島見学は印象に残っています。琵琶湖で唯一の“人々が住んでいる島”ならではの救急搬送などに関する問題点や、他の地域と同じように高齢化などに関する問題に直面していることを知りました。島はとてもしっかりとしていて、もっと散策してみたいと思いました。

今回もたくさんの方々にお世話になりました。ありがとうございました。次回からもぜひ参加させていただきたいです。

滋賀医科大学 看護学科第3学年 仁木 葵

今回、近江八幡・沖島の里親研修に参加させていただいて、小さな地域だからこそできる医療の強みというものをとても感じました。小さいコミュニティだからこそお互い顔見知りなので、情報がとりやすい、□コミ・お誘いが診療所への訪問のきっかけとなるなど、医療を身近に感じてもらえるのかなと実感しました。人と人との繋がりは、どんな場でも必要となるものなので、今回その実際を見ることができ、貴重な経験となりました。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科第1学年 清原 華也

昨年の夏につづき、今回が2回目の宿泊研修参加となりました。

まず研修1日目には、日本唯一の淡水湖の上に浮かぶ「人の住む」島、「沖島」を見学させていただきました。島全体がのどかでどことなく神秘的な雰囲気に包まれており、素敵な島だなと感じました。しかし、沖島の人の話から、観光客が少なく、医療や災害の面でも、対岸の港から離れているために様々な問題も抱えていると知り、自分自身を含め、まずは多くの人々が沖島を知ることが大切だと思いました。そのうえで、「このすてきな島を守りたい。」という強い思いが集まっていくことが重要だと思いました。

2日目には、ヴォーリス記念病院を見学させていただきました。どの建物にも、病気の苦しさを和らげてくれるような、きれいで独特な空間が広がっていました。ヴォーリス記念病院では、ホスピス希望館で働いていらっしゃる高橋恵子先生のお話を聴かせていただきました。高橋先生は、「人は生きて来た様に死んでいく。だから、今この瞬間を精一杯生きて下さい。」とおっしゃって下さいました。私は、まだ「死」を考えていても実感が伴わず、「死」に向き合うことの悲しさやむなしさを理解することができていません。しかし、高橋先生のおっしゃるように、「今」をきちんと誠実に受けとめ、大切に生きていく中で、「死」に向き合うべき時に自分らしく向き合えると考えています。また、私は「人は生きて来た様に死んでいく」ように、人は生きて来た様にしか人と交わることができないと思います。将来、医師として多くの人々と関わることになりませんが、そこにはそれまでの自分の生き方が反映されると思います。私は人と接するときにきちんと関わることのできる人間になれるように、このような宿泊研修を含め、たくさんの人々との関わりを通して、学び続けたいと思います。

多くの学びを得ることができ、本当によかったです。ありがとうございました。



▲近江八幡市内散策

滋賀医科大学 看護学科第3学年 川嵐 愛理

今回初めて里親学生支援の宿泊研修に参加して、医療人として生きていくにあたって貴重な経験を得ることができた。

私は滋賀に生まれ育ち、本研修で伺った近江八幡は地元にも近く、慣れ親しんできたが、医療という面では知らないことばかりで、特に日本で唯一の淡水湖に浮かぶ有人島、沖島の医療体制には驚かされるばかりだった。

授業では地域医療の現状、重要性を学んできたが、実際に目にするその意味を強く感じ、本研修に参加したことが自分にとって大きなプラスになった。また是非参加したい。

滋賀医科大学 医学科第1学年 井上 愉理靖

今回の研修で学んだ事は以下の3点でした。

1. 沖島での医療の現状及び地域医療の取り組み
2. 近江八幡市立総合医療センターの特徴
3. ヴォーリス記念病院の歴史とターミナルケアの難しさ
 1. 琵琶湖に浮かぶ沖島では250人程が生活しておりそのほとんどが高齢者である。救急時には地元の有志の消防団が消防艇で患者さんを最寄りの港まで運ぶ必要があり、特殊な地域事情に対して地域社会全体で柔軟に対応していた事に感嘆した。今後日本において地域医療と地域社会の連携が欠かせない事を感じ、沖島のあり方は一つのモデルとなり得ると感じた。
 2. 近江八幡市立総合医療センターの見学でまず驚いたのはその内観の美しさであった。アースカラーを基調とした非常にシックなデザインであり高級ホテルを感じさせる建物であった。病院と聞くとどこか無機質で冷たいイメージを持っていたが、近江八幡市立総合医療センターでは患者さん及びそこで働く医療従事者双方の人間らしさが確保されているように感じた。
 3. ターミナルケアにおける言葉の持つ力と脆さを感じた。同じ言葉でも相手にとって受け取り方が大きく異なる事を先生の実体験から学び、例え何も出来なくてもNot doing, but being.で側にいる事の大切さを感じた。また死のきわにいる方の孤独感や心内を、例え完全には理解できなくとも、理解しようと努力していく事の重要性を痛感した。最後に本研修を通して「資金が～」という言葉を度々耳にした。幸福生活には福祉が、福祉には医療サービスが、医療サービスにはお金が必要であり、この超高齢化社会において先立つ物をどうするか？というのが最も大きな課題であるようにも感じた研修でもあった。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科第1学年 森 優也

沖島で伺った看護師さんのお話が、地域の人たちに受け入れられる医療者になるためにはどのようにすればよいのかを考えるヒントになり、とても興味深かった。島民の方たち皆が親戚のように暮らしている環境のなかに入り込むことは、とても難しいことだと思うが、看護師さんは全戸訪問など地道な努力をされているとのことだった。また、同世代の島民どうしのつながりが強く、まとまって行動するという特性があるとのことだったが、そのような地域独特の行動の特性を理解することも、大切なことだということが分かった。また、食生活も地域によって独自性があるものだと思うが、それを理解して、地域の人たちが受け入れやすい減塩メニューを考えているとのこと、時として医療者は「正しい食生活」を押し付けてしまうこともありそうだが、押し付けるのではなく受け入れてもらえるよう工夫することが必要なのだということが学べた。自分が将来どこで働くかはわからないが、その土地の人に受け入れてもらえるために何をすべきか、大いに参考にしたいと思う。

滋賀医科大学 医学科第1学年 井村 香穂

私は里親の宿泊研修に参加させていただくのは今回が初めてだった。先輩や友人からとても楽しいと聞いていたので楽しみな反面、研修がどのようなものかイメージがわかず少し不安な気持ちもあった。しかし実際に参加してみると予想以上に濃い内容で、あっという間の2日間だった。研修では滋賀県内を中心に回ったが、初めて訪れるところばかりで新鮮だった。普段通っている大学がある地域なのに、まだまだ知らない部分がたくさんあるのだなと感じた。最後になりますが、今回の研修に関わってくださった全ての方に感謝の気持ちを述べたいと思います。

滋賀医科大学 医学科第2学年 藤森 栞

今回の宿泊研修では沖島と近江八幡を訪問し、沖島の穏やかな雰囲気、近江八幡の歴史的な街並みや左義長まつりなどの文化について知ることができました。また、医療施設の訪問と地域の医療に従事している方々のお話を通して、改めて在宅医療や地域包括ケアの重要性を感じました。さらに、将来医師として人の死をどう見つめていけばいいのかということについても考えることができました。初めてこの研修に参加しましたが、新たな発見が多くあってとても面白かったです。滋賀についてさらに知りたいと思える良い機会となりました。ありがとうございました。



▲ヴォーリス記念病院にて

滋賀医科大学 看護学科第3学年 横田 祐子

私は、今回初めて里親研修に参加させていただき、近江八幡に関する地域医療や歴史・文化について多くのことを学びました。

特に沖島では島民の高齢化や常勤医がいない現状での救急体制、診療所の実際を知ることができ、地域医療の在り方や特有の問題について考えることができました。

また、食事や交流会の際に、普段なかなか関わる機会のない先生方や医学生と様々なお話をすることができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。

この2日間を通して滋賀県の魅力を新たに発見し、より好きになると同時に、さらに滋賀県の魅力について知りたいと思いました。

滋賀医科大学 医学科第2学年 本田 郁子

今回は滋賀県の7つの保健医療圏の中から東近江圏域に訪問させていただきました。日本で唯一人が生活している湖の島、沖島では驚くべきことに島には車が走っておらず、とても静かでした。島には医師がいません。新聞などで医師の偏在の問題をよく目にしますが、私は具体的にイメージが沸きませんでした。実際に地域に足を運んで医療実態を知ること、いつかその地域の人々の役に立ちたいと思うことが医師偏在を食い止める一歩につながると感じました。

「地域包括ケア」は診療所や病院が機能分担して、地域で支え合って医療を完結しようというものです。今回見学した近江八幡市立総合医療センターは地域医療支援病院として地域医療の中核を担い、またヴォーリス記念病院は在宅での看取りの中核を担っていました。地域包括ケアではチーム医療が大切です。医師とコメディカルや看護師、行政側の連携により成り立つものだと思います。その仕組み作りが実際に動き始めているのを感じることができました。このように滋賀県の医療の現状を肌で感じられる機会を大切にして、残りの3年間を過ごしていきたいです。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科第4学年 高田 正浩

今回の宿泊研修では、自分にとっては特に2点印象的なイベントがありました。

1つ目は、沖島での地域医療です。

沖島では、大幅に高齢化が進み、看取りの在り方について、随分と考えさせられるものがありました。沖島の皆様からすれば、自分が生まれ育った島で生涯の最期を迎えたいのは当然のことですし、一方で、医療者側からすれば、危篤状態に陥った患者さんを医療資源がほとんど無い場所に放置する訳にもいかないということです。何とか、沖島で看取りを行えるくらいには医療従事者、医療資源の充足を図ってほしいものです。

2つ目は、ヴォーリス記念病院で、ホスピスの話をして頂いた滋賀医大の先輩医師の方のお話です。死に直面した患者さんにどのような言葉をかけて、どのように看取っていくのか。自分は今年度から臨床実習も始まるので、そうしたことも含めて考える良い機会になりました。また、滋賀医大の先輩の医師の方がこんなに立派な先生になられていることを非常にうれしく思いましたし、自分の励みにさせて頂こうとも思いました。

今回の宿泊研修では非常に貴重な体験をさせて頂き、誠にありがとうございました。今後とも、何卒よろしく願い申し上げます。

滋賀医科大学 医学科第4学年 赤井 奎太

在学4年目にして里親の宿泊研修に初めて参加させていただきました。

春休みに入り、周りの同級生が病院見学に行き始めている様子があって、自分も何か行動した方がいいかなと思い、滋賀の魅力や味わえると同時に、滋賀の病院見学もできるこの最高の企画に参加しようと思いました。

今回は近江八幡で、この街の歴史、観光地、病院までたくさん教えていただいて、近江八幡はとても良いところなんだろうなというのが伝わってきました。普通にここで働くのありだなと感じました。

特に印象に残っているのは、ヴォーリス記念病院で働く三ツ浪先生が地域医療について楽しそうに熱く語っていた姿です。先生と地域医療が輝いて見えてかっこよかったです。自分もどちらかといえば熱い時は熱い人間なので、引き寄せられました。

自分はまだ、将来どの診療科に就きたいとか、こういう医師になりたい、というのはまだあまり決まっていません。今回の経験を踏まえて、これから先の臨床実習で何か熱く夢中になれるものに出会えたらいいなと思います。

滋賀医科大学 医学科第4学年 木内 亮平

地域に出て、肌でその空気を感じながら学ぶ時間はとても貴重で、1年生の時から宿泊研修に参加させていただいて来ました。そして、僕がこの宿泊研修で近江八幡に訪問させていただくのは、今回で2度目となりました。以前に訪問したのは、おそらく1年生の夏で、学年があがってから見えるものはまた違うのではないかと思い、今回も参加させていただきました。実際に行ってみて、地域自体の変化を感じるとともに、僕自身の感じ方も変わった気がします。そして今、地域で暮らす人たちと協力しながら、どうすれば地域全体として、皆が良く生き、良く死ぬことができるのかを考え続けて行くことが、これからもずっと必要なのだろうなと感じます。

滋賀医科大学 看護学科第2学年 池野 茜

今回は私にとって3度目の宿泊研修であり、初の春の宿泊研修でした。毎回病院研修や地域見学、そして食事でもどれも満足させて頂き、今回も上回るほどの満足感や充実感がある研修となりました。スケジュール内容もちろんのこと、学生の参加人数が沢山おられたので、にぎやかで学科や学年問わず交流できるため、多くのお話を聞くことが出来ました。

滋賀の中でも地域によって特色が異なるため、その地域が必要とする医療のあり方や現状を実際に訪れて自分の目で見ることで、より地域医療について深く学び、滋賀の魅力や求められる事について知ることが出来ました。

とても楽しく充実した1泊2日でした。

滋賀医科大学 看護学科第2学年 丸山 晃帆

今回は、近江八幡市・沖島方面での研修でした。沖島を訪れたのは今回が初めてだったのですが、車が1台も走っておらず、聞こえるのは鳥の声だけ。とても静かで時間がゆっくりと流れている場所だなと感じました。

沖島には病院、救急車はないため、消防艇という船で患者さんを移送しているということを知り驚きました。急病人が出たときは、住人の方たちがてきぱきと動いて、患者さんを消防艇まで運び、消防艇を操縦するのも島の漁師の方たちだそうです。沖島の住人の方たちには、困ったときにはお互いに助け合うという共助の意識が根付いているのだなと感じました。

私は、今回で4回目の里親宿泊研修参加となりました。研修に参加する度に、滋賀県の新しい魅力や、医療圏の特色を知ることができています。また、次回も参加したいと思います。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科第1学年 前川 有希穂

今回、里親学生支援室の宿泊研修に参加させていただき、近江八幡のことをより知ることができて良かったです。沖島、八幡堀、ウォーリス建築と観光ができて面白かったです。八幡総合医療センターとウォーリス記念病院を見学させていただきましたが、双方の病院で、「患者さんが身を置く環境」をこだわっていることを大いに感じました。建物の中がとても綺麗でした。患者さんの心理面を考える上で、清潔さは大切なことの1つだと思いました。



▲近江八幡市立総合医療センターにて

滋賀医科大学 看護学科第2学年 村木 まひろ

私が宿泊研修に参加させて頂くのは今回で3回目になりますが、今回も普段自分ではなかなか行くことのできない地域に行かせて頂き、滋賀県の魅力、医療の現状を更に深く知ることができました。

沖島では、看護師の中島さんが島民の健康を支えるためには島民同士の口コミが鍵だとおっしゃっていたことが印象的で、その地域の特色をよく理解して、その特色に沿った保健福祉活動を行うことが大切なのだと感じました。

また、近江八幡市立総合医療センターでは、病院とは感じさせない内装や設備に驚き、見学していた私自身もリラックスした気持ちになりました。そのため、患者さんの気持ちを考えると、病院に行きやすかったり落ち着いて治療を受けられたりと非常に良い環境なのではないかと思いました。

今回の研修でも施設見学や地域の医療に携わる方々の話を聞くことで、地域医療について学ぶ良い時間を過ごすことができました。お世話になった地域や施設の方々、ありがとうございました。次回もぜひ参加させて頂きたいです。

滋賀医科大学 看護学科第3学年 新田 恵里

今回初めてこの研修に参加させていただきました。この研修で1番印象に残った言葉は、ホスピスの先生が講義の中でおっしゃった「not doing but being」です。私はこの研修に行く前に在宅看護学実習があり、その中でターミナル期のケアにおいて看護学生として何もできないと感じていました。しかし、医療者として何もできなくても同じ人間として側にいることはできるというお話を聞き、看護において患者さんへ寄り添う姿勢が大事だということを感じました。この学びをこれからの実習や将来的な看護実践に役立てたいと思います。

滋賀医科大学 看護学科第3学年 若森 万悠

今回は沖島・近江八幡を中心に、歴史を知り、特色ある医療施設を見学することができました。また、滋賀県は平均寿命が日本一位となっています。沖島で活動する看護師がどのように活動をしているのか、実際に話を聞くことができ、この地道な活動が実を結んだのだらうと感じました。

近江八幡・近江八幡市立総合医療センターの見学では、地域医療支援病院として在宅療養中の後方支援を行っているを知りました。また、ウォーリス記念病院では、在宅療養支援病院として、回復期リハ病棟や地域包括ケア病棟、緩和ケア病棟がありました。見学で回復期リハビリ病棟をまわり、リハビリに集中できる環境があれば、自信をもって在宅復帰できそうだなと感じました。

さらに、ホスピス希望館の医師から、『治すことだけでなく、その先にある「死」を見つめられる医療者になってほしい』と、講義で話されたことが印象に残っています。地域医療を支えられる医療人になるために、その人らしさ、生き方を支える視点を忘れないよう精進したいです。

旭川医科大学 医学科第3学年 白井 鈴華

この度は、初めて宿泊研修に参加させていただき大変嬉しく存じます。私は現在、旭川医科大学に在学中ですが、出身は滋賀県高島市で、滋賀県の医療や地域の状況に興味があり参加を決めました。

今回、何と云っても沖島へ行ったことは貴重な体験になりました。海なし県の離島では、どのような医療が行われているか以前から気になっていたからです。沖島で訪問看護に携わっている方が、口コミが大事とおっしゃっていたのが印象的です。このような地域で医療を充実させていくには、地域の人々との関係性が非常に重要であることがうかがえました。また、現実としてドクターヘリは使っておらず何かあれば救急艇で搬送していること、歯科の受診がまだまだであることなど厳しい側面も知ることができました。

また、滋賀医大の皆様方はとてもやさしく、おかげさまで多くの人と交流することができました。交流や施設見学を通して、医学を学ぶモチベーションも高めることができました。また参加させていただきたく思います。ありがとうございました。

～近江八幡・風光明媚な地形、歴史のある町、人情味豊かな住民～

滋賀県のほぼまんなかに位置する近江八幡市は人口約82,000人の都市です。

観光地としては織田信長が天下統一目前に築いたが本能寺の変で焼失してしまった安土城跡、豊臣秀吉の甥である秀次が基盤上に整備した八幡城下町、その水路を利用した日本一遅い乗り物「水郷めぐり」が有名です。商人の風情が佇む街並みや八幡堀沿いは、国の重要伝統的建造物群保存地区で時代劇やドラマの撮影にもよく使われています。

そして、沖合いに浮かぶ沖島は湖にある島で人が住んでいる世界的にも珍しい場所です。近年メディアにも多くとりあげられ観光地として知られてきていますが、昔から漁師さんが毎日琵琶湖の魚をとって生計をたてています。



沖島

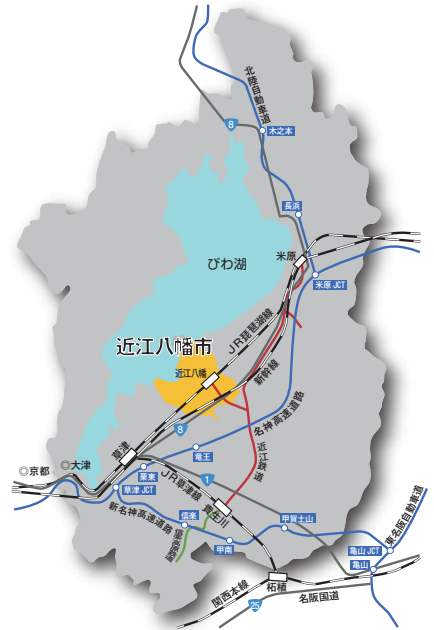


八幡堀沿いの桜

最近では交通も便利になり、京都や大阪のベットタウンとなっています。私事ではありますが、ご先祖が町医者をしていたことを祖父や叔母からよく聞かされてきました。1642年（寛永19）頃、近江聖人と称えられた陽明学者、中江藤樹の門人だった益田義則は藤樹先生に医学を学び、その後医術を生業としました。以来年代は飛び飛びではありましたが、昭和20数年まで開業医をしていました。特に問診は好評で地元の年配者の方からはいまだに語り草になっており医師の尊敬度がうかがえます。

商人の町、近江八幡では「売り手よし、買い手よし、世間よし」という「三方よし」という言葉をよく聞くとおもいます。これは売り手と買い手が満足し、なおかつ世間に社会貢献するという近江商人の教えです。近江八幡は風光明媚な地形、歴史のある町、人情味豊かな住民、正に住んでよし、仕事してよし、遊んでよし、改めてこの町に生まれ育ったことに誇りを持っている次第です。

文：株式会社ジョイックス 代表取締役／
近江八幡市益田町在住 益田 大志



水郷めぐり



昭和20年頃の益田医院と筆者の父



野田町 200万本のコスモス畑

滋賀医科大学男女共同参画推進室

滋賀医科大学では、男女共同参画推進室を設置し、仕事と家庭を両立するためのさまざまな取り組みを実施することにより、子育て中の女性医師をはじめ教職員のみなさまにとって働きやすい環境づくりに努めています。

滋賀県子育て医師のためのベビーシッター事業補助金

この補助金は、本学に勤務する13歳未満の子を養育する医師が、勤務を行うためにやむを得ず、一時的な保育委託を利用する場合に、その保育委託に支払った保育料の¼の金額が滋賀県より助成されるものです。

対象者

0歳～13歳未満を養育する本学勤務医
(常勤、非常勤、男女不問)



補助額

1回あたりの委託保育料等の2万円を上限とし、その4分の1。

ただし医師1人あたり年間委託保育料等の総額80万円(補助金額20万円)を上限とする。

利用者数

平成24年度	5名
平成25年度	11名
平成26年度	15名
平成27年度	14名
平成28年度	13名
平成29年度	14名
平成30年度(予定)	10名

「一時的な保育委託」とは??

- ① 保育所、託児所などでの恒常的な保育サービスを受けるまでの待機間の保育委託を行う場合(新規就業や復職にあたって、保育園が満員で預けられない場合)
- ② 普段、保育を行っている者や施設の都合が悪く、他の者に保育を委託する場合(家族が病気で保育ができない場合など)
- ③ 休日の出勤や急な残業などで、保育を委託する場合

※ 普段勤務にあたって保育園や託児所などを利用している場合、その保育委託は「一時的」とは認められない(月極保育利用など)

保育委託の相手方について

- ベビーシッターのほか、一時的な利用であれば託児施設も対象
 - 相手方が個人であるか法人であるかは問わない
 - 学生のアルバイトや友人への謝礼も対象
- ※ 申請者の親族(6親等以内の血族、配偶者および3親等内の姻族)に支払った経費は対象外

詳細等は、男女共同参画推進室ホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。⇒ http://danjokd.shiga-med.ac.jp/shiga_baby

平成30年度 男女共同参画推進のための講演会の開催について

－滋賀医科大学若鮎祭実行委員会共催－

「道なき道の歩き方」－女性学は何を目指すか?－

学生から要望があった、社会学者・東京大学名誉教授・認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN) 理事長として活躍中の上野千鶴子先生をお招きします。

家族、性愛、歴史、国家、建築、介護等多様なテーマを対象とした研究を積み上げて来られた「上野千鶴子先生のこれまでとこれから」を通して見えてくる、「日本の女性学のこれまでとこれから」の姿についてお話しを伺う予定です。ぜひ、ご参加ください。

日時:平成30年10月27日(土) 9:30～11:00(9:00開場)

場所:滋賀医科大学 臨床講義棟1階 臨床講義室1

対象:本学教職員・学生及び若鮎祭来場者等

ご興味のある方は、是非ご参加ください!

(参加費無料、事前申し込み不要)

※ 詳細は男女共同参画推進室ホームページをご覧ください

⇒ <http://danjokd.shiga-med.ac.jp/event/2018-10-27>



菅野勝男撮影

講師:上野 千鶴子氏

社会学者・東京大学名誉教授・
認定NPO法人ウィメンズアクション
ネットワーク(WAN) 理事長

TEL:077-548-3599 FAX:077-548-3653 Email:hqdanjo@belle.shiga-med.ac.jp

滋賀県医師キャリアサポートセンター

(滋賀県地域医療支援センター) 当センターは滋賀県健康医療福祉部医療政策課と滋賀医科大学医学部附属病院に設置し、滋賀医科大学医学部附属病院には専任医師を配置しています。

先輩医師との懇談会の様子

〈第1回〉

平成30年7月5日(火) 17:00~

講師：山原 真子先生
(医師臨床教育センター 副センター長)

テーマ：「これから医師として働く皆さんへ
—自分らしい“キャリア”を築くために—」



学生の感想

入学したばかりで、医師としてのキャリアプランが全く描けていませんでしたが、先生のお話を聞いて少しイメージすることができました。臨床医として働きながら、他の仕事も出来るというのは魅力的に感じました。お話の中であったように、色々なチャンスを逃さないようにフットワークを軽く、学生生活を送っていきたいと思います。



滋賀県女性医師交流会

テーマ みんなが活躍できる働き方改革

日時：平成30年10月27日(土)
午後2:30~5:30

会場：滋賀医科大学構内
リップルテラス2階 会議室1

参加対象：女性医師、男性医師、病院関係者、
医学生など

主催：滋賀県女性医師ネットワーク会議
申込先：滋賀県医師キャリアサポートセンター

★参加無料 **ドリンク&ケーキ付**

★託児無料(事前申込)

*お申し込みは、平成30年10月17日(水)まで



御参加お待ちしております!!

1. 基調講演

「『できない』から『できる』へ変えよう
—キャリアアップしていくために—」
日本赤十字社医療センター
第一産婦人科部長 木戸 道子先生

2. 働き方ケースカンファレンス

「自分や部下が、子育て、介護、病気…。
直面した時、あなたはどのようにしますか？」

今年度のキャリアサポートセンター 懇談会の予定

- ・第2回 平成30年10月9日(火) 18:00~
講師：小児科 中嶋 麻子先生
- ・第3回 平成30年11月27日(火) 18:00~
講師：精神科 藤井 彰夫先生
- ・第4回 平成30年12月11日(火) 18:00~
講師：麻酔科 赤澤 舞衣先生
- ・第5回 平成31年1月17日(木) 18:00~
講師：眼科学講座 助教 南川 貴之先生

【お問い合わせ先】

滋賀県医師キャリアサポートセンター
事務担当・相談窓口：滋賀医科大学病院管理課
住所：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町
TEL：077-548-3656
E-mail：ishicsc@belle.shiga-med.ac.jp
joisodan@belle.shiga-med.ac.jp
(女医相談)

滋賀医科大学医学部卒業生の卒後動向 滋賀県の医師不足は改善しているのか

滋賀医療人育成協力機構理事
滋賀医科大学里親学生支援室長

埜田 和史

1. はじめに

今年も滋賀医大を今春卒業した医学生の卒後の動向を調査しました。卒後の動向調査を始めたのは2012年でしたから、今年で6年目になります。滋賀医大では大学の使命として地域に貢献する医療人の育成を掲げており、NPO法人滋賀県医療人育成協力機構とも協力して、学生に滋賀県の魅力や滋賀県民が直面している医療の課題を伝えています。ただ、卒業後どの地域で医療人として活動するかは学生の自由な選択に委ねられているため、毎年、卒業生の動向を調査し、滋賀の医療の担い手の増加状況を検討しています。

2. 結果の概要 (表1、表2参照)

2-1) 研修先は

87人の卒業生が調査に応じてくれました。2017年度は卒業生の45人が(51%)が滋賀県内を研修先として選び、県外を研修先に選んだ卒業生は43人(49%)でした。昨年に続いて回答した卒業生の過半数が県内を研修先に選んでいました。

研修施設としては、2012年の調査以来、過半数の回答者が大学病院以外の研修病院を選んできましたが、2016年度は大学病院が過半数を超え、「新専門医制度」の影響で今後は大学病院の選択が増加するののか、と思われました。しかし、2017年度は、大学病院を選択した回答者は34人(39%)で40%を割り、昨年度の49人(54%)に比べて実人数でも減少しました。特に、滋賀医大を選択した学生が18人で、昨年の36人から半減していました。

2-2) 卒後の研修施設を選択する時に、重視した事柄

卒後の研修施設を選択する時に重視した事柄で、大学病院が研修病院に大きな差を付けられていたのは、「賃金・休日等の条件」と「スタッフ等の雰囲気」でした。逆に大学病院が研修病院に差を付けていたのは「新専門医制度」でした。大学病院であれ研修病院であれ、県外を選択した卒業生が特に重視していたのは「研修施設の所在地」で、県外の大学病院を選択する際には「研究環境」を重視していました。

大学病院が民間病院に比べて「賃金・休日等の条件」で差があることは残念ながら事実なので、このことを理由に卒業生が研修病院を選ぶことには納得できませんでした。しかし、「スタッフ等の雰囲気」の違

いで大学病院を選択する卒業生が減少したのであれば、大学に属する教員として大いに反省しなければと思いました。

2-3) 滋賀県の医師不足は改善しているのか

国が公表した最新の医師数に関する調査(2016年)によると、滋賀県の人口10万人当たりの医師数は231人で、全国47都道府県の中で34位、従来と同様に、西日本では最下位でした。全国平均が252人でしたから20人少ないこととなります。2010年の調査では、人口10万人当たりの医師数が211人で、全国順位は35位でしたから、順位は1位上がりました。ちなみに、滋賀医大が開学した1975年は、人口10万人当たりの医師数は89人で、全国47都道府県中41位でした。滋賀医大では、開学以来43年間に3700人を超える医師が巣立ち、うち、1266人が滋賀県内で活動しています。滋賀県内で診療する他大学と滋賀医大の卒業生たちが、滋賀県の医師不足状況を徐々に改善させていると言えます。ただし、まだまだ不十分な状況が続いており、今後も引き続いて医師確保の努力が求められています。

3. まとめ

今春の滋賀医大の卒業生は、昨年同様に、滋賀県内に留まる人が増えていました。国が公表した最新の医師数調査では、滋賀県の人口10万当たりの医師数は着実に増えていましたが、まだ全国平均におよびませんでした。医学生にもっと滋賀県の魅力を伝え、県内外から多くの研修医が集まるよう、より充実した研修制度を準備したいものです。

表1 滋賀医科大学医学部医学部卒業生の卒後の動向と年次推移

	卒業年度 回答者数	2012	2013	2014	2015	2016	2017
		100	86	84	112	91	87
卒後の 初期研修施設	大学病院	41%	41%	46%	46%	54%	39%
	研修病院	57%	58%	52%	54%	43%	59%
	その他	2%	1%	1%	1%	3%	2%
卒後の初期研修 施設の所在地	県内	33%	47%	42%	49%	52%	51%
	県外	67%	53%	58%	51%	48%	49%

表2 卒後研修施設を選択するに当たって重視した事項

初期研修施設	人数	大学病院		研修病院	
		県内	県外	県内	県外
卒後の研修施設 を選択するに あたって 重視した事項	研修プログラム	66.7%	68.8%	69.2%	63.0%
	研修施設の所在地	44.4%	81.3%	46.2%	59.3%
	賃金・休日等条件	11.1%	6.3%	42.3%	37.0%
	指導者	11.1%	12.5%	26.9%	29.6%
	スタッフ等の雰囲気	16.7%	18.8%	61.5%	70.4%
	施設の名声	0.0%	6.3%	7.7%	0.0%
	保育所等女性支援制度	0.0%	0.0%	0.0%	3.7%
	研究環境	5.6%	37.5%	0.0%	11.1%
	家庭の事情	11.1%	6.3%	3.8%	3.7%
	新専門医制度	27.8%	43.8%	7.7%	14.8%

開催報告

第11回「卒業後の自分を考える連続自主講座」 第4回 『世界に羽ばたく医師シリーズ』

6月24日（日）滋賀医科大学構内にて、臨床留学のバイブル的存在である『海外医学留学のすべて』（日本医事新報社）など多数出版されている**島田 悠一先生**（コロンビア大学医学部助教、循環器内科臨床指導医、

肥大型心筋症センター研究主任）をお招きし、特別講演を行いました。

米国医学の現状や日米の研修制度の違い、医師の働き方についてご講演いただき、さらに英語圏出身の模擬患者さんのご協力のもと、学生対象に英語での医療面接実習を行っていただきました。約20名の参加があり、大変盛り上がりました。



開催報告

第12回「卒業後の自分を考える連続自主講座」 『びわ湖家庭医療フォーラム』を開催しました。

7月7日（土）滋賀医科大学構内にて、日本プライマリ・ケア連合学会滋賀県支部と共催で行われました。滋賀に関係する指導医や専攻医、学生が集まり、お互いに交流を図り、家庭医療・在宅医療を紹介することが目的です。

滋賀医科大学の卒業生のおふたりからご講演いただきました。

1. 「まちづくり系医師の挑戦 医療と健康をまちづくりから考える」
福井大学医学部地域プライマリケア講座教授 **井階 友貴先生**（医学科25期生）
途中で高浜町のゆるキャラ「赤ふん坊や」も登場し盛り上がりました。
2. 「どんな医師になりたいのか」
佐久総合病院診療部長 **北澤 彰浩先生**（医学科12期生）
事例も交え熱心にご講演いただきました。

他には、研修医と学生がグループに分かれて、研修・実習紹介、専攻医によるワークショップと、滋賀県内の6つの後期研修プログラムの紹介が各医療機関からありました。

38名の参加者は活発に意見交換され、交流も深まった有意義な半日となりました。



開催報告

第13回「卒業後の自分を考える連続自主講座」を開催しました。

「卒業後の自分を考える連続自主講座」を、8月31日（金）滋賀医科大学構内で開催しました。今回は、滋賀医科大学を卒業し、臨床で活躍されている看護師おふたりから話を伺いました。

榎浪 綾花看護師（滋賀医科大学医学部附属病院看護部手術部、看護学科19期生）からは、学生時代から手術部勤務3年目の現在までの道のり、仕事のやりがいや苦労をお話いただきました。



吉田 和寛看護師（滋賀医科大学医学部附属病院看護部 副看護師長、リサーチナース/特定看護師（ICU・救急・麻酔科）、看護学科7期生）からは、看護師になると決めた高校生から現在までのキャリアパス、今後の目標などを、プライベートなお話も交え分かりやすくお話いただきました。



7人の参加学生は、興味のある分野で働く先輩の経験談を熱心に聴いていました。活発な質疑応答の様子もみられ、将来の参考になったようでした。



♪参加された学生さんからの声♪

- ・臨床で働いている方の心構えや、自分のキャリアについての考え方をうかがってみて、単純に「すごいな」という感想を抱きました。今の自分とのギャップも感じて、「自分が将来こんな素敵な看護師になれるのだろうか」という不安もあるのですが、とりあえず今は目の前の授業や実習に精一杯取り組んでいこうという気持ちになりました。
- ・キャリアについてのお話や将来の自分の人生について考える良い機会になりました。学生時代のこともお聞きできて、親近感がわきました。
- ・自分の未来の選択肢が、思ったより広いなど思えて、明るい気持ちになりました。
- ・将来の姿が今は明確に想像できませんが、今日の話聞いて、色々な選択肢があるのだと分かった。なので、じっくり自分の将来について考えてみたいと思います。



平成30年度通常総会を開催しました

5月10日(木)午後3時から、国立大学法人滋賀医科大学クリエイティブモチベーションセンターにおいて平成30年度通常総会を開催し、次の3つの審議事項を承認いただきました。

(正会員108名のうち87名が出席 うち表決委任者79名)

・平成29年度事業報告および決算報告について

事業報告および決算報告の説明ののち、決算の監査報告があり、平成29年度の事業・決算を承認いただきました。

・平成30年度事業計画および予算計画について

事業計画および予算計画の説明があり、平成30年度の活動計画を承認いただきました。
今年も次の事業を実施させていただきます。

1. 医学生等を対象とした地域理解研修活動支援事業

地域理解と地域医療者や住民との交流を目的とした宿泊研修を行う。(滋賀医科大学里親学生支援室と共催)

夏の宿泊研修 平成30年8月下旬 長浜市(長浜・湖北)方面

春の宿泊研修 平成31年3月中旬 高島市(湖西)方面

2. 医学生等を対象とした地域医療ワークショップ支援事業

- (1) 県内各地で働く医師の活動を体験してもらう「**体験学習**」を行う。
(滋賀県出身自治医科大学同窓会「さざなみ会」と共催)
- (2) 学生が自分の将来を考えるうえで参考となる先輩方の経験談等を通して、将来を考える一助となる「**卒業後の自分を考える連続自主講座**」を開催する。
(滋賀医科大学里親学生支援室、滋賀医科大学男女共同参画推進室、滋賀県医師キャリアサポーターセンター、滋賀県出身自治医科大学同窓会「さざなみ会」と共催)
- (3) 地域住民の方々との交流を通して多様な学びを得ることができる交流会へ参加する学生への支援

3. 病院・診療所実習の企画・調整事業

県下の病院・診療所での実習情報を集め、学生に周知する。

4. 地域医療等に関する市民講座開催事業

地域住民を対象に、医療の最新知識、医療機関の上手な利用方法、がん予防などについて啓発活動(地域からの依頼をうけ講演を実施する。)

5. 大学、病院、診療所等職員の学生指導レベル向上のための研修事業

県下医師・看護師養成機関教職員ならびに病院内指導者を対象に、学生への教育・学生支援技術向上のための研修会を実施する。(滋賀医科大学里親学生支援室と共催)

6. 地域医療の担い手育成に必要な調査研究活動

県下医師・看護師養成機関と連携し、地域医療の担い手育成のために必要な調査等を行い、今後の事業展開を図る。

- (1) 毎年滋賀医科大学を卒業する医学部6学年学生を対象に、「卒業後の就職先」に関するアンケート調査を実施する。

7. 地域医療の担い手育成に関わる諸組織間の連絡調整事業

医学部・看護学部への進学を希望する県内在住の高校生に、本機構の活動内容をお知らせし事業への参加を呼びかける。

8. 地域「里親」による医学生等支援事業

滋賀医科大学里親学生支援室と連携して、地域「里親」による支援事業に取り組む。

9. 本法人の取り組みや活動内容を積極的に広報し、その取り組みの支援者増加を図る事業

- (1) 「NPO法人滋賀医療人育成協力機構」ホームページからの発信
- (2) 広報誌「めでる」の発行と配付
- (3) 広報誌「めでる」、「NPO法人滋賀医療人育成協力機構」ホームページからの、滋賀県医師キャリアサポートセンター、滋賀医科大学男女共同参画推進室の活動内容の紹介

10. 本法人活動のための資金を確保する募金活動

広報活動を通して寄附金を募る。

・役員を選出について

今年5月31日をもちまして現役員の任期が満了となるため、総会において新理事・監事を選出いただきました。任期は2018年6月1日から2020年5月31日までの2年間、無報酬で本会の運営を担っていただきます。

理事長	永田 啓	滋賀医科大学同窓会「湖医会」会長 滋賀医科大学副学長	新任
副理事長	小串 輝男	滋賀県医師会代議員会議長 三方よし研修会代表	再任
//	富永 芳徳	元滋賀県病院協会会長 公立甲賀病院名誉院長	//
理事	木築 野百合	きづきクリニック院長	新任
//	桑田 弘美	滋賀医科大学教授	再任
//	埜田 和史	滋賀医科大学准教授	//
//	花戸 貴司	自治医科大学滋賀県出身同窓会「さざなみ会」	//
//	廣原 恵子	滋賀県看護協会会長	//
//	松井 善典	浅井東診療所所長	//
//	三ッ浪 健一	公益財団法人近江兄弟社理事長	//
//	餅田 敬司	(株)日本看護サービス 代表取締役	//
//	湯浅 賢一	元滋賀医科大学学生課長	新任
監事	桑村 隆	滋賀医科大学しゃくなげ会副理事長	再任
//	西川 甫	公益法人滋賀県体育協会監事	//

(敬称略・五十音順)

このたび、新たに理事に就任いただきました新役員を簡単に紹介させていただきます。

- 新理事長 永田 啓氏**は、滋賀医科大学2期生。滋賀医科大学同窓会「湖医会」会長、滋賀医科大学副学長・理事。滋賀医科大学を誰よりも愛すると自負されています。
- 木築 野百合氏**(きづきクリニック院長)は、滋賀医科大学5期生。滋賀県医師会理事としてご活躍され、滋賀医療人育成協力機構が開催する「卒業後の自分を考える連続自主講座」の講師として、何度もご協力いただいています。
- 湯浅 賢一氏**(元滋賀医科大学学生課長)は、滋賀医療人育成協力機構設立時の学生課長で、本会設立にあたり陰の立役者のひとりです。定年後の第二の人生の場として選ばれた滋賀県のために、一肌脱いでいただくことになりました。

入 会 ・ ご 寄 附 の ご 案 内

1年間の活動を実施していくための必要経費は年間550万円程度が必要ですが、この経費を皆様からいただいた会費とご寄附 並びに「地域医療を担う医師等育成事業補助金」で賄わせていただいています。

出費がかさむ折とは存じますが「地域の医療を担う医学生・看護学生の育成支援」へのご支援をいただける方々のご協力をお願いいたします。

会員は

会員の種類		会 費	入会金 (初年度のみ)
正 会 員	個 人	年会費 2,000円 + 寄附金 3,000円以上	5,000円
	団 体	年会費 5,000円 + 寄附金 5,000円以上	10,000円
賛助会員		毎年 1,000円以上 できたら 3,000円以上	

ご寄附・賛助会費をご入金された方は「税制上の優遇措置」【寄附金控除、または寄附金特別枠控除（税制控除）】を受けることができます。

ご入金された方には「寄附金の受領書」を郵送しますので大切に保管いただき、確定申告時には、「申告書」に「寄附金の受領書」を添え最寄りの税務署にご提出ください。

なお、詳細につきましては、最寄りの税務署にお問い合わせください。



里親・プチ里親



滋賀医科大学里親学生支援室では、「里親」として「里子」に地域医療の楽しさ、滋賀県の良さをお伝えいただく「里親」「プチ里親」を募集しています。

まだ若いから、経験不足だから「里親」というより「里兄」「里姉」としてなら学生との交流をしたいとお思いの方も、ぜひ「滋賀医科大学里親学生支援室」にご一報ください。

電話：077-548-2802 Email：satooya@belle.shiga-med.ac.jp

「里親」

滋賀県内で働く医師、看護師で、地域医療に興味のある学生との交流をとおして地域医療の楽しさ、滋賀県の良さを学生にお伝えいただく方です。

「プチ里親」

広く県民の皆様の中から、学生との交流をとおして滋賀県の良さ、地域医療従事者への期待等を学生にお伝えいただく方です。

編集後記



6月初旬から、滋賀県では梅雨入りしたものの梅雨時期の大雨もなく、梅雨明け後の盛夏期での水不足を心配していましたが、米原市朝日地区での突然の雨と突風による災害の発生から始まった、6月の大阪府北部地震、7月の西日本豪雨、8月の台風による被害が次々と報道され、改めて自然災害の恐ろしさを感じました。災害にあわれました地域の皆さまにお見舞い申し上げます。

滋賀医療人育成協力機構では6月1日より、吉川理事長から永田理事長にバトンが渡されました。吉川理事長には機構の設立時からの約8年間、本機構の活動基礎を築いていただきました。本当に有難うございました。

退任のご挨拶では「何かのご縁で理事長職を引き受けた」と語っておられましたが、これからも多くの方々とのご縁を大切に滋賀医療人育成協力機構の活動を進めてまいりたいと思います。

皆様の叱咤激励をよろしくお願い申し上げます。



NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでの」vol.14

発行：平成30年9月1日
編集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構
所在地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
TEL：077-548-2802 FAX：077-548-2803
Email：satooya@belle.shiga-med.ac.jp
URL：http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/